(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

世界遺産巡回講演会（上越市）2020.12.20

佐渡金銀山遺跡と世界遺産の現在
―近年の文化財政策と地域振興―

坂井秀弥（公財 大阪府文化財センター/奈良大学名誉教授）

ただいまご紹介いただきました、坂井と申します。自己紹介をしますと、私は新潟市生まれで、大学卒業後、県の文化行政課におりました。上越ですと、今池遺跡や上信越バイパスなどの発掘調査に携わりました。

文化行政課の後は文化庁に移りました。そして退官後、奈良大学に移り、今年退職して新潟に戻ってきたということであります。

今日は、佐渡金銀山遺跡と世界遺産の現在ということでお話していきます。長年、佐渡金銀山の世界遺産登録に向けた活動が続いていますが、登録はもう目前に迫っているものと、私も思っております。

私は文化庁に16年おりましたが、ちょうどその年、1993年に日本で世界遺産の登録が始まり、法隆寺と姫路城が世界遺産になりました。

そこから16年間、文化庁の当時の記念物課というところで、私は直接には世界遺産を担当することはありませんでしたが、石見銀山や平泉の個別の遺跡には携わったことがあります。脇から世界遺産の状況を見てきましたが、その間に、世界遺産の状況もかなり変わってきたように思います。私が見てきた間に、どのような変化があったのか、どういう背景があったのか、そして佐渡が世界遺産になるに当たってどのようなことが求められるのか、ということをお話ししたいと思います。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

文化財保護40年の「私の信条」
「地域の文化財を慈しみ、わがまちを育む」

- 私の専門は考古学。遺跡の発掘調査により、歴史を明らかにする。遺跡は歴史を物語る研究資料である。
- しかし、それだけではない。地域に残る遺跡や守り伝えられてきた文化財は、先人の豊かな営みをつたえる大切な財産。だからこそ慈しみをいだき共感し、現代が歴史の頂点にあるのではないことを知る。
- 大切な財産を守り活かしながら未来へ伝え、よりよい地域社会と国をつくることが、文化財保護の意義である。
- そのためには、①行政（制度的・財政的支援）、②専門家（学術的支援）、③住民・市民（主役）が、三位一体で取り組むことこそがもっとも重要である。

まず、私が文化財というものをどう考えているか、申し上げておきます。
私は遺跡の発掘調査、考古学が専門ですが、考古学というのは、遺跡を発掘して歴史を明らかにしていきます。遺跡は学術資料ということになりますが、それだけではありません。地域において守り伝えられてきた文化財というのは、先人の豊かな営みを伝える大切な財産であり、だからこそ、人々は文化財に対して慈しみの念を抱き共感して、現代が歴史の頂点にあるのではないと、戒めのように思うわけです。ですから、大切な財産を守り活かしながら未来に伝える地域社会、国を作ることが文化財保護の意義だと、私は考えております。

私自身40年も文化財に携わっている中で、若い頃に考えていたことに間違いがあったなと思うところがあります。今、文化財の保存活用というのが盛んに言われております。文化財を守り伝え、その意義を知って、うまく文化財を保護していくためには、行政・専門家・住民市民の三者がそれぞれの役割に従って、三位一体で取り組むことが大事です。私は行政にいた立場でもあり、考古学の専門家でもあったために、私が一番文化財のことを考えているんだという思い上がりがありました。ところが、文化財というのは、一番大事なのは、主役は住民・市民であるということです。この方々が、地域にある文化財の価値に気づいて、それによって豊かな暮らしを営めるようになる。それが理想だと。このことに気づいたのが、実は残念ながら40歳を過ぎてからでありまして、反省をしているところです。

世界遺産というのは、その中身について学術的な解明をしなければなりません。そのために、OUV（顕著で普遍的な価値）について佐渡市も新潟県も専門的な研究をしていますし、様々な支援をしてきています。それは、財政的な支援も含め多岐にわたるのですが、そのことによって、地域の方々の暮らしが豊かになっていく。それは必ずしもお金だけではなくて、昔からこの地域で、多くの人々が生活をし、ここまで時代をつないできたということを感じることができる。これが、文化財の力ではないかと私は思っています。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

内容構成

1. 私が訪ねた世界遺産

・それほど馴染みのない海外の遺産から数多くのことを学ぶ

2. 日本の世界遺産とその変化

・1993年から登録が始まった世界遺産は2000年頃から変わってきた

3. 佐渡金銀山の歴史とその意義

・佐渡金銀山は文句なし日本屈指で、世界にも通じる文化財

4. いまに続く地域社会と金山の文化財

・現代の地域社会は佐渡金銀山と同じく1600年前後に成立し、いま大きく変貌・衰退しており、多様な文化財がいま危機にある。

＊文化財（cultural properties）と文化遺産（cultural heritage）は、厳密には意味は異なるが、日本では区別して使用しない場合が多い。

これから、4つほどに分けてご説明しますが、まずは私が実際に訪れたヨーロッパの世界遺産の写真を中心にご紹介しようと思います。

2番目に、日本の世界遺産とその変化。3番目に佐渡金銀山の歴史と意義。最後に、いまに続く地域社会と金銀山の文化財という話をしていきたいと思います。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

まず、私が訪ねた世界遺産です。

私は奈良大学に移りまして、毎年２月から３月に学生たちと海外の遺跡を訪ねる機会に恵まれました。文化庁にいると日本全国いろいろな場所を見て回りますが、海外の遺跡というのはそれほどなかったものですから、とても勉強になりました。

最初は、2010年にギリシャに行きました。首都のアテネの中心にアクロポリスというものがあります。それから、パルテノン神殿。ギリシャの時代ですから、二千数百年前です。日本で言えば弥生時代が始まったくらいの時代に、こんなに巨大な石の建物を作っているということに実際に触れ、驚がくしました。かつては鉄筋コンクリートで修繕していたんですが、現在、そういう誤った修理をやり直しているのだと、現地の人が説明してくれました。アクロポリスの下に新しくできた博物館からも写真を撮りましたが、丘全体がお城のようになっているんですね。

やはり、遺跡というのは現地に行って現地に立ってみる。肌で感じるというのがとても大事なのだと思いました。

右はスペインのバルセロナにあるサグラダ・ファミリア教会。日本でも有名ですね。何十年もかけて作り続けていることはよく知られています。私は、今も建設中のものがなぜ世界遺産になるのかと不思議だったんですが、よく見ると、前方の４本の棟、これは少し色が黒っぽいですね。今作っているのは、後ろの方です。世界遺産に登録されているのは、手前の部分なんです。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

イタリアでは、ローマの街の中心に、円形の競技場コロッセオがあります。20メートルの高さに石が積み上げられています。ギリシャ・ローマ時代とはよく言いますが、すごいものを作ったなと感心します。

左下は、ほぼ同じ時代のポンペイ遺跡です。2000年前の火山の噴火で埋もれてしまった街です。二百数十年前に発掘されたのですが、この街の中を歩くことができます。パン屋があったり酒屋があったり。

右はフィレンツェの街です。写真でも分かりますが、四角い形の新しいビルが全くありません。16世紀頃からこのような風景がずっと続いていたのだと思われます。日本と違い、海外はとても景観を重視するということをよく感じました。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

続いてはイギリスの有名なストーンヘンジです。巨大な石が円形状に並べられています。3000年ほど前の遺跡です。そこから北に少し行くと、ダラムという都市があります。そこに、世界遺産に登録されているダラム大聖堂という教会があります。それからこちらは大学の寄宿舎として使われている食堂ですが、９月はちょうど夏休みなので、ホテルとして開放されています。私も実際に世界遺産に泊まるという経験もできました。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

これはポルトガルの首都リスボンです。リスボンにはテージョ川という川があり、その川に突き出た場所に、港を守るお城、ベレンの塔があります。ポルトガルやスペインでは、15世紀の終わりに大航海時代が幕を開けます。大航海時代は、このテージョ川の河口の港から始まりました。ここからヴァスコ・ダ・ガマやマゼランなど、いろいろな人々が出航していきました。目の前の港の水面が、地球の裏側の日本までつながっている。大航海時代というのが日本の戦国時代にも波及して、それが次の江戸時代という新しい時代を生むんだなというのを肌で感じることができました。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

次は東南アジアです。カンボジアのアンコールワット。カンボジアの国旗にも描かれているほど、国民にとって象徴的な文化財です。もともとは長い間ジャングルに埋もれていました。こちらも世界遺産に登録されているベイメリア遺跡という所に行くと、木が生えていて、石がごろごろと散乱しているんですが、こういう状況のものを長年をかけて修復し、今のアンコールワットのような形になっているということです。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

これは中国です。秦の始皇帝陵に、兵馬俑という、土で作った人形が累々と置かれています。これは奈良の東大寺の大仏のモデルになったとされる龍門石窟です。今や中国はイタリアと並んで世界遺産の数が世界一ですが、間違いなく近いうちに世界単独トップになるでしょう。それだけ多くの素晴らしい遺産を持っているというのがよく分かります。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

なぜ、世界遺産か？

○いま世界的に、国内的にも、世界遺産をめざして、国と関係県・市町村、民間団体などが活発な活動を行っている。－それは資金援助があるからか？

○－NO！　世界遺産に登録されても、日本への国際的な資金援助はない。

・日本は国際的には財政的に豊かであり、資金援助は受けられない。国内的にも基本的に同じ。

－それでもなぜ世界遺産なのか？

○どこの国も各地域も、遺産を誇りに大切にしているからではある。しかし現在の課題である地域振興をめざしているところが大きい。日本では経済が伸び悩んだ2000年前後から世界遺産が白熱した。

・それが、新たな地域の見直しをもたらした。

いくつか紹介しましたが、日本のあちこちでも世界遺産への取組は盛んに行われています。なぜなのか。多くの人は資金援助があると思っています。世界遺産になるとユネスコからたくさんお金をもらうことができて、それで修理ができるのではないかと。実は、それは全然ありません。世界遺産というシステムは国際的な協力の中でできているのですが、日本は豊かな国ですので、ユネスコに拠出しているお金もアメリカに次いで2番目です。一方、世界遺産になって国内の制度で文化庁がお金をたくさん出してくれるかというと、そういうこともありません。

ではなぜ世界遺産なのか。たしかに遺産を誇りに大切に思っているからというのはあるでしょう。しかし近年、特に2000年以降、海外でもそうなのですが、日本各地で世界遺産にという声が高まってきたのは、私は地域振興という側面、つまり、社会の構造が大きく変わりつつある中で、かつて開発で発展してきた各地域がそれではもたなくなっているということがあると考えています。経済が伸び悩む中、2000年前後から各地で世界遺産の取組が過熱しています。これが考え方としておかしいかというと、私はそうでもないと思っています。取組から、新たな地域の見直しという側面をもたらしていることも事実ですし、我が町にそんな歴史、文化遺産があったということに初めて気づいたという声は、あちらこちらで聞かれます。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

石見銀山・佐渡金銀山と地域振興

【石見銀山】2007登録 昭和30年代に地域の衰退のなか、住民主体の町並み保存が始まった。世界に誇る銀山への思いがのちに「大森町伝建地区」に展開。それが結果的に2007年、世界遺産に結実した。

【佐渡金銀山】 同じ頃まだ金山が機能し、経済成長期、自然や金山等の観光ブームにのり発展。時代が変わった今、豊かな遺跡・文化財の価値に気づき、世界遺産をめざして、文化財を活かした地域づくりが進む

・佐渡は豊かな文化財とともに観光にもつながる多様な資源があり大きな潜在力を有している。世界遺産候補になることはそれを証明している。

佐渡金銀山と同じような遺跡として、石見銀山が2007年に世界遺産に登録されています。石見銀山と佐渡を比べると、石見銀山では昭和30年代に既に町並み保存というものが始まっています。きっかけは、早い段階から人口流出によって町の過疎化が進んだことでした。その中で、1975年に法律が改正され、古い町並みを文化財の制度として守る伝建制度を活用し、町並み保存の動きが出始めたのです。そういう運動が早くから展開され、結果として、2007年に世界遺産に登録されたということだと思います。

一方の佐渡は、同じ頃には、まだ金山は稼働していました。経済成長期に佐渡の島の自然、金山などの観光ブームがあって、多くの観光客が押し寄せました。それによって地域が支えられ、佐渡は地域振興ができていました。佐渡は観光によって地域社会が支えられてきたのです。今、観光のスタイルは大きく変わってきました。団体旅行から個人旅行が中心になり、それぞれの旅行者が独自の魅力を発見していくようになりました。その中で、佐渡独自の価値に気づき、結果として世界遺産を手にしようとしているところまで来ているのだと思います。私は、観光にもつながる多様な資源があるという点では、佐渡は大きな潜在力を有していると思います。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

2・日本の世界遺産とその変化

資産名称	登録年
法隆寺地域の仏教建造物	93年
姫路城	93年
古都京都の文化財	94年
白川郷・五箇山の合掌造り集落	95年
原爆ドーム	96年
厳島神社	96年
古都奈良の文化財	98年
日光の社寺	99年
琉球王国のグスク及び関連遺産群	00年
紀伊山地の霊場と参詣道	04年
石見銀山遺跡とその文化的景観	07年

●屋久島、●白神山地、●知床、●平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群、●小笠原諸島、●富士山－信仰の対象と芸術の源泉●富岡製糸場と絹産業遺跡群●明治日本の産業革命遺産●国立西洋美術館（ル・コルビジェ）●「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群●長崎と天草地方の隠れキリシタン関連遺産群●百舌鳥・古市古墳群

続いて、日本の世界遺産とその変化ということで、1993年に日本で世界遺産の登録が始まりました。法隆寺と姫路城です。そして自然遺産では屋久島と白神山地がこのとき同時に登録されました。このときのことを記憶していますが、世界遺産に登録されたという新聞記事は本当に小さなものでした。私も文化庁に行ったばかりの頃で、世界遺産と言っても皆よく分かっていない状態でした。翌年は京都、その次が白川郷、そしてその次が広島の原爆ドームと厳島神社、というように毎年登録が続いていきます。1年休んで奈良、翌年に日光、さらに翌年に琉球と、このあたりまでは順調に登録が進みました。その次が4年空いて、紀伊山地の霊場でした。当初、この名前を聞いたときに、日本の人がどれほどこの遺産について知っていたでしょうか。その3年後が石見銀山です。石見も当時は読めない人が多くいたほどです。

どうも振り返ると、紀伊山地あたりから世界遺産というものが変わってきたのかなと。石見銀山は、イコモスの勧告では記載延期、つまりまだ問題があるからもう少し検討しなさい、というのが出されました。結果としてこれは覆されて世界遺産に登録されましたが、イコモスという専門家組織も、石見銀山をスムーズには世界遺産として認めませんでした。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

紀伊山地の霊場と参詣道　2004年登録, 登録基準; C (ii) (iii) (iv) (vi)

・紀伊山地には、起源や内容を異にする「熊野三山」、「高野山」、「吉野・大峯」の三つの霊場とそこに至る「参詣道」が生まれ、都をはじめ各地から多くの 人々の訪れる所となり、日本の宗教・文化の発展と交流に大きな影響を及ぼした。（和歌山県世界遺産センターHP）

＊「それほど有名ではない」「わかりづらい」遺産
→世界遺産、文化財の認識が変わった？

出典：国土地理院ウェブサイト
（https://maps.gsi.go.jp/#10/33.735761/135.650940/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1）を加工して作成

これらがどのような中身かというのを説明していきます。紀伊山地の霊場と参詣道は、紀伊半島の山中にあるもので、高野山は有名ですね。高野山、吉野・大峰、熊野という計3箇所の霊場に、かつて京都の貴族たちが参詣しました。その後も、多くの人たちが参詣に訪れています。この聖地とそこに至るいくつかのルートが世界遺産になっています。ここは、目に付くような大きな建物があるわけではありません。自然の山、川、滝が世界遺産になっているのです。

そして、3年後に登録された石見銀山。正式な名称は、「石見銀山遺跡とその文化的景観」です。世界遺産には、その中身を示すタイトルが付けられています。わざわざ文化的景観という文言が入りました。石見銀山は、日本海から8キロ内陸に入った山の中にあります。世界遺産になっているのは、銀鉱山跡、鉱山町、港、山城、そしてこれらをつなぐ銀山街道です。非常に広範囲です。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

日本の世界遺産の経緯

【世界遺産条約】 1972年制定、75年発効、193カ国批准。92年日本批准、 93年法隆寺等4件登録

【日本の暫定リスト掲載】=世界遺産候補

- 1992年：10件未彦根・鎌倉、96年：原爆ドーム
- 2001年：紀伊山地霊場・石見銀山・平泉
- 2007年・08年：（地方提案）富士山・富岡製糸場・明治産業革命・宗像沖ノ島・長崎キリシタン・百舌鳥古市古墳群・未佐渡・飛鳥

＊2001年の候補はそれほど古く、大きく、きれいな建造物などはない‥　　ー文化財の評価のあり方が変わった。

ここで、日本の世界遺産の経緯を簡単にまとめました。世界遺産は1972年に条約ができて、その3年後に発効しました。現在までに多くの国々が批准していますが、日本の批准は遅く、1992年でした。このとき、日本の暫定リストを作っています。このときは、文化庁の専門家たちが、建物であれば国宝になっているようなものをリストアップしたわけです。原爆ドームは政治的に1996年に入りました。これらの登録が進んでいった段階で追加されたのが、2001年の紀伊山地、石見銀山、平泉の3件です。これは文化庁の中で委員会を作って検討しました。このときに加わったものには、従来のような大きな建造物がありません。平泉も、金色堂は写真で見ると非常に分かりやすいのですが、そのほかの浄土庭園、もちろん現地に行くときれいで美しいのですが、あの世を示す庭ということで、何か大きなものがそそり立っているかというと、そうではありません。

それには理由があるのですが、このあとにお話ししていきます。2007年、2008年のときは、地方から提案を受け、文化庁の審議会で検討する形で、富士山、富岡製糸場、佐渡などが追加されました。こちらは比較的、シンボル的なものが分かりやすく存在しているかと思います。全国から提案を受けて、文化庁も世界遺産室を作り、体制を整えて臨むようになりました。明治日本の産業革命遺産は、九州、山口、静岡、岩手の計23資産から構成されるものです。これは登録されるときに大変問題になりまして、世界遺産委員会の最中、韓国とのいろいろな折衝でもめました。あわや登録が流れるかというところまでいきましたが、ぎりぎりのところで登録されました。朝鮮人徴用工問題というのがあるということです。世界遺産は各国の自国の正当性を主張する場としても利用されているような感があり、国際問題になることもあります。

(c)坂井秀弥　無断転載・複製厳禁

2000年前後からの世界遺産

【対象拡大の方向性】1994年「グローバル・ストラテジー」

・従来の遺産は欧州に集中し、宮殿・教会建築・中世都市など画一的な傾向もあったことから、世界の多様な文化を評価する視点で見直した。

①文化的景観：棚田など人と自然の共同作品

・紀伊山地、石見銀山、潜伏キリシタン

②産業遺産：鉱山・製鉄所・製塩の生産関係、鉄道など交通、水利施設など

・明治日本産業革命遺産、富岡製糸場

③20世紀の建築：シドニー・オペラハウス（1973年）

・ル・コルビジェの建築

➡今も生きる文化財を対象としたもの（古い・廃絶したものではない）

2000年前後の世界遺産を見ると傾向が変わっていますが、これには背景があります。世界遺産委員会で検討されたグローバル・ストラテジーというものがあり、今までの世界遺産とは違ったものを登録していこうではないか、という動きがありました。それが文化的景観、産業遺産、20世紀の建築というようなものです。文化的景観として初めて登録されたのはフィリピンのコルディリェーラの棚田群です。農民たちが世代を超えて造成、営農してきた結果、できた景観です。すごい権力者がお金を使って作ったものではないわけです。こういう流れもあり、日本でも文化的景観という制度ができました。それから、新しい産業革命以降のもの、シドニーのオペラハウスも1973年にできたものです。日本も、20世紀の終わり頃から、新しい建物を文化財として扱うようになってきました。